

## 朝鮮通信使に贈られた屏風にみる近世やまと絵大画面の展開

## —古典主題の受容を中心に—

鄭 美娟 (東京大学)

江戸幕府の成立後、慶長12年(1607)から文化8年(1811)にいたるまで朝鮮国王は十二回にわたり通信使を日本に派遣し、将軍と国書を交わした。その際に幕府から贈られた屏風を贈朝屏風と称する。

韓国には五点が現存しており、明和度(1764)の「忠信吉野軍図屏風」六曲一隻(韓国国立中央博物館蔵)は、鍛冶橋家の狩野探林が手掛けた。『義経記』に基づき、雪の吉野山で義経配下の佐藤忠信が敵方の横川覚範を射る場面を描く。これは、中国春秋時代の弓の名手・養由基の伝説を下敷きとするものであり、朝鮮でもよく知られた中国の武人と日本の武士を重ねることで、「武」の国としてのイメージを伝える目的があったと推定される。発表者が2024年に行った調査を通じ、屏風背面の料紙に金泥による文様が確認でき、本作が贈朝屏風として特別な格式をもつことがわかった。

2021年、鹿児島県歴史・美術センター黎明館において、玉里島津家資料に含まれる「御屏風下絵写」が紹介され、文化度(1811)贈朝屏風十双の原本について絵師・主題・図様が初めて明らかとなった。ここに含まれる「頼信渡海・義家雁行乱知伏兵図屏風」六曲一双は、右隻を平忠常の乱(1028)、左隻を後三年の役(1083~87)とし、木挽町家の狩野伊川院栄信(1775~1828)が描いた。画面は「後三年合戦絵巻」(東京国立博物館蔵、1347年)の人物を再構成しており、同絵巻が元禄14年(1701)に修理されたことを契機に、その図像が源氏将軍の伝説として広く流布していった様相を示す。

同じく「御屏風下絵写」に含まれる「舞楽図屏風」六曲一双は、「青海波」「輪台」「貴徳」「散手」「狛柁」の曲目から構成され、板谷桂意広長(1760~1814)が描いた。「板谷家伝来資料」(東京国立博物館蔵)を参照すると、制作にあたり広長と幕府書物奉行・成嶋衡山との間で曲目の選択に関する交渉が重ねられ、五曲に絞り込まれていく経緯が明らかとなる。また、「桜町・菊亭図屏風」六曲一双は駿河台狩野家の狩野洞白愛信(1772~1821)が担当し、右隻は桜を愛し「桜町中納言」と称された藤原成範(1135~87)、左隻は琵琶の名手・今出川兼季(1281~1339)の邸宅を描く。屋代弘賢(1758~1841)著『贈朝鮮屏風注文』によれば、前者は『源平盛衰記』の「清盛息女」が典拠、後者は『王代一覧』に基づき、兼季から後醍醐天皇への琵琶秘曲伝授を主題とする。

以上、本発表では贈朝屏風の絵師と主題の分析を通じ、古代中世の源氏による「武」を継承する徳川将軍家の対外イメージ、そして正徳度(1711)に新井白石が関与して以降、舞楽・和歌・音楽といった「文」のイメージも強調されていく様相、さらに近世やまと絵大画面における古典受容と幕府主導による制作過程の実態を明らかにした。